

林の手入れで気づくもうひとつの「森のめぐみ」

草苺 健

林の未科学領域

編集部からいただいたテーマは「休日の森づくり」である。1年のうち、週末は50回以上やってくるが、わたしはウィークデーには札幌に通勤しながら、週末は、ほぼ必ず苫小牧の苫東のエリアにある雑木林に通ってひとときを林の手入れに費やす。だから小屋の日誌には、数えるとちょうど50回ほど、その日の作業や林の現況に関する数行の簡単な書き込みがある。晩秋11月から雪が消える3月末ころまでの伐採のシーズンに大体1ヘクタールの間伐をこなし、その後からは薪ストーブ用の薪作りをし、初夏から秋にかけては林道やフットパス、小屋周りの草を刈る。ある年の除間伐の際に伐採本数を数えてみたところでは、ひとシーズンに大小込みで5~600本程だった。大変な仕事量に思われるかもしれないが、林の手入れに付随する間伐とか、林道のブッシュカッターを使った除草の作業というのは、汗まみれ、泥まみれ、草まみれになるのにもかかわらず、いわば媚薬のような側面を持つからあまり苦痛には思わないものだ。



というのも、林を手入れする「なぜ」という一般的目的、「いかに」という技術はある程度理論的な積み重ねで語ることができるのだが、「何のために」という主体側の動機、それで「林はどうなったか」「どういう体験が残ったか」という段になると、とても主観的な怪しいジャンルに及んでくる。そこでは今まで感じたことのない不思議な体験や発見をすることが少なくない。林の捉え方は美学や心理学などとも親和性が高いし、樹木たちと対話するようになれば哲学や宗教の世界になる。森林美学は別にすると、まさに林学や森林科学ではほとんど扱わなかった分野が待っているのである。そして深い。



というのも、林を手入れする「なぜ」という一般的目的、「いかに」という技術はある程度理論的な積み重ねで語ることができるのだが、「何のために」という主体側の動機、それで「林はどうなったか」「どういう体験が残ったか」という段になると、とても主観的な怪しいジャンルに及んでくる。そこでは今まで感じたことのない不思議な体験や発見をすることが少なくない。林の捉え方は美学や心理学などとも親和性が高いし、樹木たちと対話するようになれば哲学や宗教の世界になる。森林美学は別にすると、まさに林学や森林科学ではほとんど扱わなかった分野が待っているのである。そして深い。

一対一で向き合う山仕事

しかし、今の森や自然の関わり方において、この部分がもっとも欠けている希薄な領域であるのは間違いない。「自然環境を保全するため」などと森づくりのミッションが表現されることは昨今非常に多いが、実はもっとも恩恵をこうむるのが「人の体とこころ」である。そこを見落とすと人と林の関係はずっと疎遠なままで終わる。もっといえば人と自然の関係をつかみ損ねる。そのために、林や樹木と付き合うとき、出来るだけ群れてはいけない。独り、またはふたりを単位としたい。林や樹木からのささやきが聞こえてこないからだ。

森づくりという言葉は美しい響きがある。その美しさはいつのまにか、親子で自然に親しむ体験や、数々の遊びも取り入れながら自然の見方や付き合い方を見出していくような誘引にもなり、いわば環境教育的な視点から主として行政を中心として随分働きかけがなされてきた。カリキュラムも充実しNPOを含めたリーダー的な人材層も厚くなったと感じている。それでも、一人一人を個人としてほぐして行ったときの、独りの人間と一本の樹木、人間一人とひとまとまりの林の交流について注目しガイドする方はまだまだ多くないと思う。



年間を通じて、草を刈ったり、青アザをつくって時には大怪我をしそうな目にあいながら林の手入れをしていて、ようやくわかったのがそのことである。伐採する樹木の全体をながめわたし、選び、伐り、ドッシーンと地面に倒す。こうした一対一の世界の向こうに、個人的な発見と深い満足があった。

自然と始まる祈り

樹木は人を攻撃したりはしない生き物だから、わたしたちとは静かな付き合いが生まれ、略奪的な営みもそこから発生してきたともいえる。しかし、もっと踏み込んで、樹齢数十年の樹木を何かに利用するために伐採して利用しようという段になると、ことは一変する。一本の樹木を無事に倒していくまで、一つ一つの行程に潜む危険。向かい合う樹木たち一本一本が、わたしの伐採の行為に釣りあうなにかのリアクションを起こしている、と思うことがよくある。自分のいる方向に倒れてきたり、太い枝が頭に落ちてきたり、倒れた幹が別の丸太をはねかえらせ飛んできたり、林の手入れは樹木たちの気を抜けないリアクションの連続だともいえる。だから、林の手入れは集中して全力で樹木たちと向き合わなければならぬのだ。そして、もちろん汗みどろで。

だが、いつしか樹木たちとの付き合いの方法を知るようになる。無駄なことに使うので



はない、意味があって伐採させてもらうのだから、わたしを守ってくれ…。週末の仕事のはじめに、そう林と樹木たちに「祈る」ことを覚えるのだ。

また、一本一本の樹木たちとは育ち具合を形で判断しながら、これから先も残すのか、伐採するのかを判断しなければならないのだが、一つ一つをこうして眺めていくことというのは、公園を散策したり遠くから漫然と風景として眺めたり

する行為とは大きく違う。一種の対話だといってもいい。この時間は日常のなかにはない、注目すべき自然とのつきあいの入り口である。おそらく、これまでも、これからも誰も見えてはくれないだろう視線で、自分と相手が向き合うのである。世界で二つとない個性が出会い、時間を共有する経験。この関係性のなかで、自分が世界に独りしかない固有の存在であることをもう一度確認して、くつろいだ不思議な気分になるのである。

風土とつながる

わたしの林や樹木との付き合いの実体験からいえることは、林の手入れをするということは、資源や環境や景観への働きかけであると同時に、樹木や林のスピリチュアルな部分に向き合うことである。言葉を代えれば林や樹木は自分を写す鏡である。林や樹木や、総体の森羅万象を科学的にのみ捉えることに執着する日常をはなれ、自分の心の趣くまま、気持ちよさ、畏れ、喜び、悲しみ、風土との繋つながり感など、内面に湧き起こるころの波を素直に受け取って感じ取ってみる。そういう付き合い方を身に着けたり、または自分



に許してみると、身の周りの自然とのつながりはぐんと広がる。自然を守る、などと理論的に言っていたつもりのスタンスが、がらりと変わり、もっと情緒的で実存的で調和型のしなやかな発想が生まれてくる。場合によっては、霊的なつながり、と言っても良い。森羅万象に生かされている自分が、いたずらに風土を破壊するような行為をしてよいはずがない、自分のからだこそ自然そのものだ、もっとへりくだった営みにならなければ、と

気づくようになるのだ。

こんなことを、わたしは林の手入れで教えられた。体が樹木のそばでリラックスし、カラマツなどの大木にもたれると自然と呼吸が深くなるのがわかるようになった。ゆっくりした呼吸でリラックスしたわたしたちの体とところは、風土とニコニコして結びつく。

(おわり)

草苺のプロフィール

1951年山形市生まれ。1975年北大農学部卒業。1976年から苫東工業基地で緑地の保全、緩衝緑地づくり、景観形成に携わる。1998年から(財)北海道開発協会勤務。webで「雑木林&庭造り研究室」を主宰、「北の森林と健康ネットワーク」副理事長。技術士(環境部門)。

画像・mallyの説明

- 1 手入れしたフィールドに創ったフットパス
- 2 コナラの雑木林の新緑に包まれた作業小屋
- 3 山菜を採ったあとの、林の昼食
- 4 手入れをすると紅葉が変化する(手入れした左側が真っ赤になる)
- 5 冬の作業小屋と薪
- 6 八戸から見えたフットパスのお客さま
- 7 一人でカラマツの間伐をする筆者